



チェルノブイリ 29 周年祈念式典・スピーチ

2015 年 4 月 26 日

チェルノブイリ救援・中部 原 富男 戸村 京子

私たちは今日、ウクライナと日本が抱く共通の苦しみに共感し、励ましあうために、チェルノブイリ救援・中部を代表して日本から来ました。

ウクライナ・ジトーミルでは、チェルノブイリ事故の困難な戦いから 29 年という長い年月が経ちましたが、日本の大震災によって引き起こされた福島原発事故からは、去る 3 月 11 日に 4 年が経過したところです。

残念ながら、日本はチェルノブイリの尊い経験から学ぶことができませんでした。福島では未だ事故は終息しておらず、壊れた原発の中や周辺では、作業にあたる多くの人々の被ばく労働が続いています。東日本の広範囲の美しい野山や田畑、土や川の水、海までも放射能で汚してしまいました。国は農地や住宅地の放射能を取り除く除染を続けていますが、まだまだ進んでおらず、未だに 14 万人の人々が避難生活を余儀なくされています。

しかし、そのような状況の中で、ウクライナの人々による支援によって、フクシマの人々は励まされています。ジトーミルの人々は、フクシマのために多くの寄付金を集めてくださいました。皆さんに深く感謝を申し上げます。私たちの団体では、それでウクライナ製の放射能測定器を買いました。そして、市民ボランティアを募って放射能を測り、企業の協力も得て汚染マップを作って、フクシマの住民のために役立てています。日本でも寄付金を集めて、市民による放射能測定センターを開設しています。食べ物・水・土の放射能を測って、人々に危険か安全かを知らせています。(P2 に続く)



〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST プラザ鶴舞 5 階 B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京 UFJ 銀行 名古屋営業部 (店番号 150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

また、ジトーミルの学校の子どもたちから、絵やクリスマスカード・ビデオレターが送られてきています。これらは、日本の子どもたちや人々をどれだけ励まし、喜ばせたことでしょう。今や、ジトーミルとフクシマの子どもたちや市民は、真の友人となっています。例え 8,000 キロ離れた国であっても、同じつらい経験をした人同士のように、その痛みがわかるのです。ウクライナと日本の市民が、それを証明しています。

私たちは、この私たちの友情をこれからも育み続けていくことを、ここに誓います。つらい経験をともに乗り越えて、喜びを互いにもたらすために。

4月26日、午前中から暑い日差しの中、州行政関係者や事故処理作業員などが集まり、市内3か所のチェルノブイリ事故の記念碑を巡って、祈りと花を手向けました。午後から消防局前記念碑で、チェルノブイリ事故29周年の記念式典が始まりました。州行政長などのメッセージの後、日本からのゲストとして、原さんとともにスピーチをし、献花しました。式典終了後、消防局建物前で州行政長などを事故処理作業員が取り囲み、長時間にわたって被災者の支援を直に訴えていました。 (戸村 京子)

チェルノブイリ原発事故から29年 今なお続く困難な日々

東部地域で戦争状態が続く中、今回の訪問で一番の気掛かりは「障害者3団体（リクビダートル基金・障害者支援基金・消防士基金）」の方々の生活でした。各団体の代表と話した内容を報告します。いずれも、チェルノブイリ事故処理作業に携わった方々です。現在の皆さんの病気は、がん・心臓血管疾患・甲状腺・糖尿病・高血圧・リウマチ・肝臓病・腎臓病・膵臓病…などとなっています。原発事故による病状は、がんのみでなく様々な病気として出現しているのです。これらの病気の診断には、いろいろな診断装置が必要ですが、障害者団体が州に働きかけ、州立成人病院にMRIを入れる事が決まっているそうです。実際にはまだ設置されていませんが、一日も早い設置の為に、我々訪問団も成人病院に出向きました。

現在ウクライナでは、様々なことが改悪されつつあり、その一つが「汚染地の区割りが変更され、第4ゾーンが廃止された」ことです。また、「事故処理作業員の保養は、第一カテゴリー被災者のみ」とされてしまいました。更に、「市内公共交通の無料の権利も、第一・第二カテゴリーの方のみ」となりました。

戦争の影響もあり、国民の8割の人は生活が苦しくなっており、ガス代・電気代などの公共料金が大幅に値上がりしています。「輸入薬が2~3倍値上がりし、入院しても薬を自分で用意できないので、自宅に戻り寂しく死んでいかざるを得ない。被災者の医療費無料の権利や子どもの食事手当が、全て打ち切られ、国は被災者のことは忘れてしまいたいと思っている。国産の薬の5割は粗悪品で、治療効果がない…」など、共通して困難な状況を語ってくれました。私達は、皆様に「特別な困難」に対する支援を呼び掛けたいと思います。 (原 富男)



総会とチェル救デーのご案内

早いもので、総会の季節が訪れました。

ポレーシェ誌上で活動の詳細をお伝えしておりますが、年に一度の直接お伝えする機会です。

会員だけでなく、どなたでも参加いただけます。
ぜひお越しください。

■日時 6月13日(土)

午後 1時30分 ~ 4時30分

■場所 ウィルあいち 3階 会議室④

地下鉄「市役所」駅 ②番出口より東へ徒歩約10分

【第1部/13:30~】

2014年度 定期総会

2014年度活動報告および2015年度活動計画

【第2部/14:30~】

チェル救デー ~交流会~

4月のウクライナ訪問報告、5月の菜の花見会などの南相馬報告、そして最新福島原発汚染状況報告などを盛り込みながら、交流会を行います。

この1年間も、さまざまな活動を行ってきました

2015.3

チェルノブイリノフ
クシマ講座
(料理編)



2015.3 東日本大震災犠牲者追悼式



2014.12
クリスマスカード
キャンペーン

2015.3

事務所引っ越し



2014.9 南相馬での種まき会

南相馬便り

(神谷 俊尚)

☆4月に入り、タケノコや山菜がたくさん持ち込まれ、「とどけ鳥」も久しぶりに活況を呈してきました。相対的には汚染度の低減傾向が見られますが、コシアブラ(4検体) 26,040~1,407 Bq/kg、ぜんまい(9検体) 7,908~15 Bq/kg、タラの芽(7検体) 1,229~8 Bq/kg、たけのこ(16検体) 927~4 Bq/kg、わらび(10検体) 126~0 Bq/kg、ふきのとう(4検体) 75~5 Bq/kg、ウド(4検体) 16~4 Bq/kg(いずれも南相馬市内)と、採取場所により大きな幅があり、「測定してから食べる」必要性を示しています。浪江町で採取したわらびと同じ場所で採取した土壌(セットで5検体)の測定結果は、土壌の汚染が7,641~28,155 Bq/kg、わらびが654~1,938 Bq/kgとなっており、相関関係が認められました(「とどけ鳥」ブログ 5/14 参照)。

☆「とどけ鳥」は、ポレーシェ前号(No.146 P4~P5)で紹介しました「ホットスポットファインダー」(GPS連動型空間線量率自動記録システム)の導入を検討し、LUSH JAPANチャリティバンクに助成金を申請、5月1日に助成金決定の通知を受け、購入できることになりました。この測定器の特徴は、①Csl(Tl)シンチレータと半導体型光検出器を組合せた、超高感度γ線検出を搭載 ②応用速度が速く、1秒ごとの空間線量率の変化をグラフ化可能 ③公園・室内の写真を撮り、その空間を歩行して測定し、写真上に各ポイントの線量を落とし込んで可視化が可能…という特色があり、今後、子ども達がよく利用する公園の測定や、2016年4月に「帰還」が決定されている小高区民の住宅内外部の線量測定等に役立てていく考えです。測定器は5月末に納入され、研修後6月中旬から稼働を目指しています。

☆第9期南相馬市、第5期浪江町の放射線測定活動を、4月18~19日、25~26日の4日間、多くのボランティアに支えられて実施しました。今回は、4日間とも晴天に恵まれ、車のトラブルもなく測定活動を完了することができました。(測定結果については、P8を参照してください。)

☆(社)南相馬農地再生協議会の菜の花畑は、GWにあわせたかの如く満開となりました。萱浜地区で開催した「菜の花迷路」は、マスコミにも多く取り上げられ、GW期間中約1,000名を超える賑わいを見せました。



また、5月17日には「菜の花見会」を開催しました。準備不足でしたが、相農高生を始め40名の参加をいただきました。残念ながら、原町区内の圃場は花が終わっていましたが、小高駅付近の圃場は一面に花が咲き誇り圧巻でした。その後、再生協議会の女性による手料理に舌鼓を打ちながら、この1年間をパワーポイントで振り返り、参加者からのご意見もいただき、秋の「種まき会」での再会を約束して散会しました。

☆昨年9月下旬から販売を開始した菜種油「油菜ちゃん」は、多くの方々から応援をいただき、3月末までに「270g換算で4,200本」を販売することができました。今年度収穫予定の菜種は、昨年以上の収量が見込まれています。「油菜ちゃん」の継続販売には、まだまだ課題も多く、今以上の販売努力が求められます。

【課題】①…地元での販売拡大:「油菜ちゃん」のみではなく業務用・加工品への利用等 ②…県外販売先の拡大 ③…賛助会員の拡大を通じた「油菜ちゃん」ファンの拡大等々、問題山積です。

☆再生協議会は、新年度に入り圃場拡大に伴う各種農機具導入の準備に追われています。乾燥機・粗選機・トラクター・播種機・ビニールハウス等、作業量拡大に伴い最低限必要な機材ばかりですが、総額は1,750万円です。現在、市・民間合わせ1,200万円の助成が決まっていますが、550万円が不足状態です。再生協議会として、稲作作業受託等をしながらか資金確保に努めてはいますが、皆様のより一層のご支援をお願い申し上げます。



フクシマからウクライナへ ありがとう (小林 友子)

去る4月26日は、チェルノブイリ原発事故から29年の
祈念日でした。今年の3月11日に、ウクライナの人々から
福島に、ビデオメッセージが届きました。一生懸命に、
日本語で話しかけてくれた子ども達のメッセージ…

嬉しかったです。震災から丸4年、毎年クリスマスにたくさんのクリスマスカードを届けて
くれました。震災とともに福島第一原発事故がおき、どうしたら良いか、どうなっているのか知
りたい私達に、150台の放射能測定器を届けてくれました。チェルノブイリ原発事故で傷つ
いた人達のカンパ金で、買ってくれたのです。そんな想いを抱きながら、2013年9月に、チェ
ルノブイリ救援・中部のスタディツアーで訪れたウクライナでは、訪れた所すべてで人々の温
かな心使いと励ましがああり、事故後の暮らしを教えていただき、福島で生きていける事を確認
できました。その想いと、何時も励ましてくれたウクライナの方々に、御礼のメッセージを届
けてほしくて、南相馬からのビデオメッセージを友人の廣畑さんの協力を得て作成、4月26
日に間に合うようにチェル救の方に託しました。彼女は、南相馬市小高区蛭沢という所に住み、
震災当日は、目の前で津波に襲われた家々を見、迫り来る水からやっと逃がれ生き抜いた人
です。その彼女に、津波の写真を見ながらビデオメッセージを作ってもらいました。辛かったは
ずです。そんな人にダメ出しをする私は、とんでもなく残酷でした。それでも引き受けてくれ
たのは、私たちの現状をお知らせし、ウクライナの方々にお礼と感謝の言葉を伝えたいと知
ったからです。本当は、もっと時間をかけて修正して届けたかったのですが、気持ちは伝えられ
たと思います。神野さん、戸村さん、ロシア語に翻訳してくれた竹内さん、チェルノブイリ救
援・中部の皆さん、とどけ鳥のメンバーの皆さん、会員の皆さん、本当にありがとうございました。
福島からウクライナへ「ありがとう」を言うことができました。私達は今、福島で生き、
暮らしています。また、メッセージを届けたいと思います。「ありがとう」を！

***5月14日、ドンチェヴァさんから以下のメールが届きました。**

小林友子さんのDVD配布先は、

- ① 第25番学校
- ② 『チェルノブイリの消防士たち』
- ③ 障害者基金
- ④ 『リクヴィダートル』基金
- ⑤ ユーリヤ・ゴルカヴェンコ（日本語を勉強している女の子）
- ⑥ ナロジチ地区病院
- ⑦ オヴルチ地区病院（同院の人がジトーミルに来る時に渡します）
- ⑧ プリヴォローチエ村の診療所
- ⑨ 農大 です。私の事務所にまだいくつかあります。



〈ドンチェヴァさん(右)〉

6月1日は、児童保護の日です。ホステージ基金は、州立小児病院（血液腫瘍センター）、
州立精神病院（小児セクション）、ナロジチ町幼稚園（サレジオ小の支援の遊具は、今月
末までに購入できると思います）の訪問をすでに予定しています。

病院では、青葉幼稚園作成のポスターと、小林さんのDVDを渡すつもりです。

小林さんにくれぐれもお礼をお伝えください。なんといっても、ビデオのメッセージは
伝わりやすいですし、他の催しでも使うことができますので。

特集!! 第9期(18次&19次) 測定隊が行く!!

被ばくした牛たちの生きる意味

(佐伯 恵子)

震災の年の秋から参加させていただき、8回目の測定となりました。今回は、私たち参加者で南相馬市への道のりを運転して行くという事で、ナビに入力したり、用意してくれた地図をたどりながらの行程です。いつも任せっきりのため、いざ運転席に座ると、7回も参加したとは言えない道順の認識のなさでした。それでも三人で交代し、無事、松の湯旅館に到着。翌日から測定、天気も快晴の予報です。初日、小高区双葉旅館の女将さんらの案内で測定。鉄山ダムでは、線量はかなり高く1.99~2.45 μ Sv/h、下流の横川ダムでも0.50~0.82 μ Sv/hといった状況でした。にもかかわらず、山々は新緑と新芽に覆われ、水の流れは清く、旅館の女将さんはタラの芽や蕨・山菜のあふれる景色に残念そうで、私も大好物のタラや蕨に口惜しくて歯ざしりでした。素晴らしい風景の場所で、ピクニックのようにランチしましたが、なにげに座ろうとした私に女将さんは、「葉っぱの上じゃなく砂利の上に座ってね」と声を掛けてくれました。普通の事ができない生活、常に不安と気がかりを持ち続ける生活。普通に生活しながら、年に数日この場所に赴くだけの私。心ではずっと寄り添っているつもりなのに、実際は何も分かってない。当然だけど、やはり忸怩(じくじ)たる思いでした。翌日、毎回同行して下さる鹿島区のTさんとの測定は順調にはかどり、線量は0.1~0.2 μ Sv/h、山間部の数か所だけ0.7 μ Sv/hという数値でした。帰りの視察で、浪江の「希望の牧場・ふくしま」を尋ねましたが、今回初めて吉沢さんにお会いでき、直接お話を聞く機会に恵まれました。地震の当日から今日までを熱く語る姿に、心打たれました。渋滞の6号線を避けてわき道を通って牧場に戻った為に、津波から逃れられた事、「餓死か殺処分命令」に抵抗し、牛たちと運命をともにする決意をした事。戦う相手は国・東電、そして放射能。被ばくした牛たちの生きる意味を、私たちみんなが考えなければならぬと思いました。8回参加していく中で、半年毎に街は綺麗に(更地に)なってきたてはおり、造成や建設の勢いも感じましたが、その一方で、町はずれの新緑の中に累々と山を重ねていく黒のフレコンバックや、それらを隠すように続く白い壁に、寒々しさを禁じ得ませんでした。後日届いた「通販生活」夏号の特集は、奇しくも「希望の牧場・ふくしま」吉沢正巳の訴え"...胸を塞がれたような思いで読みました。



浜通り訪問記 序

(櫻井 善行)

2015年3月11日、東日本大震災から4年が過ぎた。さすがに4年も過ぎれば、震災の爪痕も見えなくなるはずだ。杜の都仙台の駅頭にたっても、数年前に悲惨な出来事があったことを忘れさせるぐらい活況を呈している。もちろん、震災復興バブルのたまものであるのだが…。ところが、沿岸に目を移すと光景はがらりと変わってしまう。破壊された家屋や田畑に乗り上げた船舶、がれきの山や寸断された道路などは少なくなったが、多くは更地となり、福島浜通りまで行くと、瓦礫に変わって黒いビニール袋に入れられた除染残土とおぼしき物が、所狭しと並んでいる光景は異様である。私は、チェルノブイリ救援・中部の放射線測定ボランティアに参加して、もう5回目か6回目になる。年をとると力仕事は無理でも、測定ボランティアぐらいなら…という思いで参加したのが、最初の動機であった。今も気持ちはそうだが、それ以上に「この地域社会が、どのように変化しているかを自分で確かめたい」という気持ちの方が強くなった。とともに、そこに住む人々の生活ぶりや表情もみてみたいと思ったからである。2011年6月、南相馬の鹿島から始まった測定ボランティアは、原町から小高まで測定地域が広がり、一昨年からは浪江町にも足を踏み入れることが可能になった。春と秋、季節が移りすぎて行く頃に顔を出すようになったが、いつの間にか私のライフサイクルの1つとなりつつある。しかも、人見知りの私もやっと地元の人と会話ができて、小さいけれども繋がりができるよう

になった。職をリタイアしてから始まったこのドラマは、筋書きがない分、新たな出会い発見も含めて、まだまだこの先続きそうである。



<あすなろ交流広場(浮舟の里)>

地元の人たちの鼓動が伝わってくる

(川村 伸一)

4月18日と19日、原町区(鹿島区南部を含む)と小高区を測定しました。2日目は、想定外でしたが、東大大学院で都市工学を学ぶ在日韓国人女性が同行することになり、いつも以上に緊張感?を持って回りました。事故から4年が経ち、確かに線量は下がっているものの、この先に終わりが見えているわけではありません。

測定終了後には、被災地を見て回りました。南相馬農地再生協議会が取り組む各地の菜の花畑、「えこえね南相馬」のソーラーシェアリング、アンテナショップ「希来(きら)」、「あすなろ交流広場(浮舟の里)」等々。いずれも、復興に向けて自分たちの力で地道に活動を続けている人たちの、鼓動のようなものが伝わってきました。また、食事を兼ねての地元の方々との交流会では、近くに座った廣畑裕子さんのお話を聞くことができました。自宅は小高区にあり、今は鹿島区の仮設住宅で暮らしている方です。その鹿島区で、市民グループ「子どもといっしょの会」を立ち上げて、仮設に隣接する空き地を子どもが遊べる広場に整備したり、花を栽培して出荷する「のらとも農園」を主宰されています。震災のとき、中学生だった息子さんとともに、奇跡的に助かったことなどを聞かせていただきました。

復路は、初めて国道6号線から常磐道を南下するコースを通りました。第1原発に近い浪江～双葉～大熊～富岡町では、ずっと手持ちの測定器のアラームが鳴り続けていました。その後は、 $0.10\mu\text{Sv/h}$ ほどに落ち着きましたが、原子力施設が林立する茨城県東海村の東海PAあたりでは、車中にもかかわらず $0.15\mu\text{Sv/h}$ に上昇しました。案の定と言うべきか、不気味な影が日本列島を覆っているような気がしました。

大震災と原発事故を経験し、私たちの価値基軸は・・・

(柳瀬 要)

私は、2013年10月の測定に参加して以来、今回で4度目の測定参加でした。

2013年当時、放射能汚染水の漏えい報道が連日続く中、憤りと自分も何かしなければとの思いからの測定活動への参加でした。測定の回を重ねるごとに放射線量は下がってきていて、放射線量マップも、オレンジからブルーの計測値 $0.3\mu\text{Sv/h}$ を示すところが増えてきています。また、浪江町へも測定に入ることができるようになり、より一層汚染の実態が把握できるようになりました。

しかし、あの震災と原発事故を経験し、私たちの価値基軸は大きく変わった、変わらねばならないと考えていましたが、そのような思いは意識的に風化させられつつあるように感じます。それは、海外への輸出の承認と、川内原発を始めとした再稼働の動きに示されています。今回私は、1日目は原町区、2日目は小高区の山際を地元の方々で測定しました。2日目の測量には、東京大学大学院の都市工学専攻の先生も参加され、一緒に測定活動を行いました。岩手の復興支援に目途がついたから、今度は南相馬の復興に、住民の立場から関わりたいとのことでした。地元の方には、測定終了後、帰宅できない自宅も見せていただきました。自宅には帰れず、仮設住宅で暮らさなければならないことは、大変辛いことだと思いました。除染作業が進む中、「仮・仮置き場」が増設されていきますが、3年間の期限が守られる保証は全くありません。地元の方が「とどけ鳥」に、「たけのこ」や真野川で取れた「シジミ」の測定依頼に訪れてきました。その人たちに对するスタッフの親切丁寧な対応に、救われる思いがしました。



第9期(第18次・19次) 空間線量率測定結果(速報)

(池田 光司)

4月、第9期の空間線量率(空間の放射能の強さ)の測定が行われました。福島第一原発事故から4年経ち、海に近い地域では、測定された放射能の値が汚染されていない地域と同じ位にまで下がってきた所も、増えてきました。一方、山間部、特に原発に近い浪江町の山間部では、汚染(主に放射性セシウム)によって、体外から浴びる年間の放射能が依然「20mSv/年(自然界で浴びる放射能の約20倍)」を超える所も存在します。全体的に、空間の放射能の強さは、事故当初の3分の1以下になってきているものの、事故当初の汚染された度合いに応じて、4年経った今でも汚染が残っているという状況です。これらのことを、今回の測定データの分析結果から見ていきます。

まず、空間の放射能が「汚染されていない地域と同じくらいまで下がったところ」が、どの程度あるのかを見ていきます。使っている測定器は、自然の放射能と汚染による放射能を区別できないことと、放射能は測る場所や時間などによって測定値がばらつくことから、「測定値がこれ以下だったら汚染による放射能はない」とは言えません。そこで、便宜的に0.15 μ Sv/h以下(同じ測定器を使って、名古屋で測っても検出され得る高めの値)を、汚染による空間の放射能がかなり低いレベルとし、その割合を【表1】に示しました。割合は、該当する測定ブロック数を全測定ブロック数で割って、地区毎に求めました(測定ブロックは一辺500mの正方形)。また、現在と同じ範囲の地域が測定可能となった第5期(事故から2年)と、今回第9期(事故から4年)の割合を比べてあります。

【表1】各地区の空間線量率が0.15 μ Sv/h以下のブロックの割合

鹿島		原町		小高		浪江	
第5期	第9期	第5期	第9期	第5期	第9期	第5期	第9期
9.8%	35.6%	3.2%	22.0%	8.1%	21.4%	2.3%	8.8%

【表1】から、いずれの地域も「0.15 μ Sv/h以下のブロックの割合が大幅に増えている」ことがわかります。海側の地域の多くが0.15 μ Sv/h以下になっていることを、作成されたマップで確認することができます(マップでは濃い青色でAAと表示)。

一方、汚染によって体外から浴びる年間の放射能が「20mSv/年」以上のブロックは、浪江町の山間部に59ブロックありました(南相馬市の測定した地域にはありませんでした)。山間部の測定が可能になった1年前の第7期の101ブロックと比べると、大きく数が減っていますが、依然として、山間部で測定したブロックの4分の1近くを占めています。この様子もマップで確認することができます(マップでは濃い赤色でIと表示)。

測定値が0.15 μ Sv/h以下であった地域では、汚染による空間の放射能はほぼなくなってきていると言えます。しかし、土の中の放射能(主に放射性セシウム)がなくなったということではないので、引き続き土の取扱いには注意をしていく必要があると思います。このような地域では、土壌中の放射能を測ることで、生活の中で被曝を防ぐためにはどうしたら良いかが、より見えてくると思います。一方で、空間の放射能が高い地域については、引き続き空間の放射能を監視しながら注意が必要だと思います。

事故から4年が過ぎましたが、福島第一原発事故による放射能汚染のあった地域では、依然として放射能と向き合わなければならない現状があることが、測定結果とマップを透して見えてくるように思います。チェル救では、今後も半年毎に測定を続けていく予定です。

(マップは6月上旬に完成します。入手を希望される方は事務局までどうぞ。)

福島原発事故から4年たった今、改めて原発事故にどう向き合うのかが問われている。取り返しがつかない放射能汚染とそれがもたらす被曝の影響、更には故郷を追われた人々と放射能を恐れて自ら故郷を捨てた人々、汚染を知らながらそこで暮らしを続けなければならない人々、自らの意思に反して分断された家族や地域社会、そうした諸々の被害者とどう向き合っていくのかが今問われている。風化が忍び寄る原発事故の今を問う。

差別と分断をもたらす原発

そもそも、原発の立地は過疎地でなければならなかった。「万一の事故に備え人口密集地に原発を作ってはならない」と定めた法律がある。原発は初めから差別を前提に作られてきたのだ。放射能に対する恐怖を札束で中和し、時が経つとともに立地自治体と住民が原発依存症になって行く現実を利用し、これまで54基もの原発を作ってきた。「安全神話」は、そのために必要なものだった。チェルノブイリ事故があったにも関わらず、日本の国民の多くにとって、いつしか原発事故は他人事になっていた。そのことが、福島原発事故後の人々の対応の違いに顕著に表れたといえる。

原発を推進してきた国と産業界は、放射能の被害をことさら小さく見せるために、福島県の小児甲状腺がんの顕著な発症率増加を、放射能と無関係と強弁している。事故直後、経産省内に「ピンチャン・プロジェクト」なるものができた。原発事故のピンチを経済活性化のチャンスにしよう、という発想である。それは事故から4年経った今、見事に実現している。福島県内で発生する膨大な量の除染作業は、すべてゼネコン業界に国民の税金を流し込む仕組みに結実した。

政府は、「20mSv/年以下は安全」として、強制的に避難させた住民を被曝環境に回帰させ、あたかも事故を過去のものとして、オリンピックに向かおうとしている。人間の命よりも経済を優先する発想は、これまで原発を推進してきた思想と何ら変わらない。

放射能のもたらす理不尽

一方で、放射能に対する恐怖は大多数の国民にとって受け入れがたいものであることが露わになり、被害者であるはずの国民同士

の間にも、様々な溝を生み出した。

福島避難者らは、避難先で差別され孤立した。居残った人々と避難した人々との間にも溝ができた。福島の農家は、汚染によって被害を受けただけでなく、実際には汚染がなくても風評によって生きる糧を失い、自ら命を絶つ人々も出た。都市住民の中には「1Bqも食べたくない」と考える人もいる。それは当然の権利であり、主張である。しかし、そのことが福島の人々にとっては差別である。

これは放射能がもたらす理不尽である。そもそも、事故がなければこうした差別や分断はあり得なかった。原発事故によって、「我々は事故前とは違った世界に生きざるを得なくなった」と、自覚しなければならない。

放射能に対する正しい知識を共有し、汚染地で生きざるを得ない人々に対する共感と被曝対策をともに担い、新たな世界の扉を開ける努力を続けなければならない。現実を避けるのは問題の解決につながらない。

責任追及と未来への努力

事故をもたらした者たちに対する責任追及は、厳しく行わなければならない。東電や原子力業界・政府が、事故の責任を認めない限り、被災者は浮かばれないばかりか、今後もまた事故は起こるだろう。

12年前に名古屋で講演した、ベラルーシの女性作家、S・アレクシエーヴィチは「チェルノブイリ事故は、近代の便利主義や経済優先主義がもたらしたものだ。今、価値観を変えないと再び原発事故は起こるだろう」と、福島原発事故を予言していた。

原発事故によってもたらされた差別と分断を乗り越え、未来に向けた努力を被災地の人々とともに続けよう。

(2015年5月21日 河田)

サーベイメーターによる空間線量の測定を実施して思うこと

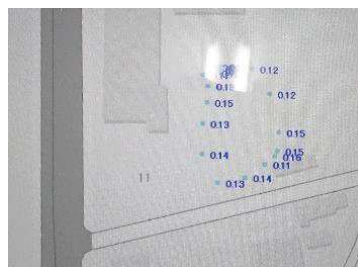
(小林 岳紀)

先般、カタログハウス様より「シンチレーション式サーベイメーター」をお借りできたので、放射能汚染マップ用の測定とは別に、特定の測定エリアを選んで、住宅内・庭廻り・公園廻り・幹線道路などの空間線量を、詳細に測定することができました。その測定結果を紹介します。

- ①雨樋下や軒先下は線量が高いと言われていたのですが、小高区の「帰還準備地域」にある住宅の庭廻りで測定を行った結果、その差異は周辺の数値（0.26～0.60 μ SV/h）に対して4.5～10.2倍超と、大幅に高い（2.65 μ SV/h）状況が改めて確認されました。
- ②南相馬市内の大型公園である高見公園では、除染も進み低めの数値（0.06～0.20 μ SV/h）でしたが、一方で、高見公園から1km程離れた除染が未完了である近隣公園では、約2～4倍程の数値（0.24～0.41 μ SV/h）でした。「お子さんやお孫さんが遊ぶ公園の線量が、未だに高いままでは心配だ」とするご意見が多く寄せられ、市役所への申し入れに良い資料であると喜ばれました。
- ③浪江町を、海岸線から福島県中央部へ横断する国道114号線（全長約40km）について、1.5km毎に測定した結果では、海岸から5kmの市街地から急激に数値が上がりだし、30km地点までの区間は高い数値を示していました。当該地点は「帰還困難地域」に指定され、未だに自由な立ち入りができない地域です。また、道路中心線部と路肩部の線量を比較すると、道路中心部（0.09～6.92 μ SV/h）と路肩部（0.18～27.37 μ SV/h）とでは、大幅な差異が見られました。これは、道路中心部の除染が終了している反面、路肩部は除染が不十分であり、元々、除染の対象範囲でない事に起因すると考えられます。従って、路傍の草地などは除染作業が行われておらず、安易な立入は控えるべきと思います。

詳しい内容については、放射能測定センター・南相馬『とどけ鳥』のブログ（2015年4月8日・9日）にアップしている資料をご覧ください。

当放射能測定センター・南相馬では、空間線量率マップの作成により汚染地域と度合いを可視化する活動、食品・土壌・井戸水などの放射能濃度を測定する活動を中心に、広く市民の皆様放射能汚染の実態をお知らせする事を主眼にして、活動を行ってきました。南相馬市では、2016年4月を目途にして「帰還準備地域」および「居住制限地域」の解除に向けた取り組みを行っています。その際に、住民の皆様からは「自宅に戻って大丈夫か？」との声を多く耳にします。帰還準備に取り掛かっている方々にとって、居住空間や生活圏の放射能汚染の実態を細部にわたり知る事は必要不可欠です。



福島などの親子を伊那谷へ！ 今年もやいま～す！

「夏休みリフレッシュツアー」参加者・ボランティア 募集！

2013年から始めた伊那谷親子リフレッシュツアーも、今年で3年目を迎えます。毎年資金がない中、青息吐息ですが皆様に支えられて今年も開催します。

今年は、7月24日～27日までの3泊4日、長野県伊那市長谷地区の「溝友館」を主会場として、開催します。

これまで参加された方の感想では、「福島では野原を自由に駆け回れなかったけど、伊那では自由に遊べた」とか、「福島では睡眠薬を飲まないで眠れなかったけれども、薬なしで眠れた」など、放射能のある生活や仮設住宅での制限のある暮らしから解放され、普段体験できない遊びや気分転換がはかられてきました。



今年も、①陶芸体験、②乗馬、③そば打ち体験など、遊びのプログラムを用意しつつ、なるべく自由にのんびりできるようにしたいとも考えています。

資金面では、相変わらずバスチャーター代が予算の4割と、バス代が高く厳しい状態ですが、助成金申請もしながら頑張るつもりです。

例年のように、資金・食材・花火などのカンパも募集しておりますので、ぜひご協力をお願いします。また、食事づくり・見守り・運転などボランティアも募集しております。よろしくお願いします。

(問い合わせ：0265-73-9355 原まで)

〈皆様からのご質問にお答えします〉

植物油(油菜ちゃん)が、放射能で汚染しない理由

(河田 昌東)

セシウム以外の核種については、ウクライナでの実験でストロンチウムも測定し、「油粕には入るが、油には全く入らない」ことが分かっています。その他の核種については測定していませんが、基本的には入っていないと考えています。

理由は以下の通り・・・

- ① ナタネに限らず植物が放射能を吸収するのは、土壌中の水分に溶けている（水溶性といいます）物質だけです。
- ② 植物に吸収された放射能は、一般に細胞中の水分に溶けたイオン化状態で存在します。
- ③ その結果、搾油の際には水分を含む油粕に放射能が移行し、油には入って来ないのです。
- ④ 土壌中には自然放射能の天然ウラン（U238）やトリウムという放射能もありますが、これらは超重金属なので、植物には吸収できません。

こうした理由から、植物油は放射能で汚染しないのです。なたね以外にも、大豆油やエゴマ油も、セシウムの検出限界 0.026Bq/Kg でも ND（検出せず）です。ヒマワリ油は若干の汚染（数 Bq/Kg）がありますが、これは不純物のせいで、精製すれば除去できると考えています。

結果的に、植物油はなたね以外でも汚染しないと考えています。



事務局便り

各種助成金報告や決算がひと段落し、事務所はやや落ち着きを取り戻しつつあります。今は、総会に向けて事業報告や活動計画・予算案の最終調整に入っています。会計担当である私はといえば、引き継ぎの真っ只中にあります。私事で恐縮ですが、8月より産休・育休に入ることになりました。復帰は2017年1月の予定です。この間の会計業務は、今までボランティアとして事務局を支えてくださっていた、上田さんにお任せすることになりました。現在、マニュアル作成に奮闘中です。身体にしみついている業務を、一つ一つ言葉にする作業。1年半後には復帰するとはいえ、少し寂しくもありますが、子どもを連れて出勤する日を楽しみにしています！（兼松）

野馬追タオル 今年も販売開始！！

今年の「相馬野馬追祭」は、7月25日（土）～27日（月）に行われます。「相馬野馬追祭」および南相馬の復興を祈願して、復興祈願タオルを販売します。

タオルの色は、相馬野馬追神旗争奪戦の三社御神旗の色、黄（小高神社）・赤（太田神社）・青（相馬中村神社）です。今年のタオルデザインから年号がなくなり、使いやすくなりました。

お尋ねは、救援・中部事務所まで。

- ※ 価格：1,500円／枚
- ※ 材質：綿100% サイズ：34×82cm
- ※ 6月13日 定例総会（P3参照）の会場でも販売します。（美）

相馬野馬追復興祈願タオル



編集後記

- ☆久しぶりの風邪で、平日の昼間 寝込む羽目に。遠足の小学生のはしゃぐ声が、近くの保育園から響く歌声が、鳥の爽やかなさえずりさえも…騒音となる始末。病人はわがままで。（佳）
- ☆長野県飯山市で開催されている「菜の花まつり」に出かけた。見渡す限り菜の花畑、山の麓まで黄色くてとっても壮観。「こ～んなに広い菜の花畑！ どのくらいの広さ？」と聞いたら12haって。え!? 南相馬の菜の花畑の方が、も～っと広ってこと？ 頑張ってるね、南相馬！（美）
- ☆クライシスアクターズ（危機や恐怖を演技する役者達）を動員した「偽旗作戦」が横行している。「オデッサ虐殺事件（ウクライナ）」「マレーシア航空17便撃墜事件（東ウクライナ）」「ISIS断首事件（中東）」「シリア毒ガス兵器使用事件（中東）」「サンディフック小学校銃乱射事件（アメリカ）」「ボストンマラソンテロ事件（アメリカ）」「シャルリー・エブド本社襲撃事件（パリ）」「エボラ出血熱捏造事件（西アフリカ）」などなど。歴史をさかのぼれば、「911事件」も「湾岸戦争」も「ベトナム戦争」も「ケネディ暗殺」も「第一次・第二次世界大戦」…も、すべて自作自演の「偽旗作戦」であった。幸い、人々が真実に気づくまでの時間は、圧倒的に短くなっている。「これらの出来事は、偶然発生した」と考える人は「陰謀論者」ではない。「これらの出来事は、政府や法人あるいはその他の組織が行う秘密作戦である」と考える人は「陰謀論者（真実追及論者）」である。貴方はどちら？（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473